

『八戸藩遠山家日記』第九卷

萱場 真仁

はじめに

本書は、これまで刊行が継続されてきた青森県八戸市立図書館所蔵の「遠山家日記」を翻刻した史料集の最新巻である。「遠山家日記」とは、昭和四九年（一九七四）に遠山景敏氏から八戸市に寄贈された「遠山家旧蔵本」一六七五点のうち、寛政四年（一七九二）～大正八年（一九一九）までの歴代当主が書き継いできた日記一一一点であり、平成二八年（二〇一六）八月二五日に県重宝（歴史資料）に指定された。

遠山家は、安政四年（一八五七）段階の八戸藩の分限帳によれば、知行高一二五石一合を数える家だったとされる。八戸藩で一〇〇石以上の知行高を持つ藩士は、文久年間の分限帳によれば全三七五人のうち八五人しかいなかったため、遠山家は八戸藩のなかで比較的上級武士に位置づけられる家だったといえる。

県重宝に選定された理由にもある通り、「遠山家日記」は江戸時代から大正時代に至るまでの一二七年間書き継がれてきたこと、それが全国的にみても他の類例をみないこと、さらには江戸時代の武士個人の生活記録としての意義だけにとどまらず、八戸藩の政治動向や社会・経済のあり方までもがわかることから、非常に貴重な史料であるといえる。本

稿で紹介する第九巻では、慶応元年（一八六五）～明治四年（一八七二）までの八冊分を翻刻して掲載しており、同期間内の遠山家当主は、九代目の庄七と一〇代目の安次郎であった。

以下、本稿では評者が興味深く感じた日記記事の内容と、本書を読んだので若干の所感を述べることにしたい。

一 日記記事内容の紹介

はじめに、日記の筆者である九代目庄七と一〇代目安次郎の家族構成について確認しておく。九代目庄七は、文政八年（一八二五）九月一日に七代目庄右衛門とその後妻との間に生まれ、最初の名は五十三郎だったが、後に庄馬、庄七へと改名している。遠山家は七代目庄右衛門と先妻の次男で、庄七の異母兄にあたる庄太夫が八代目を継いでいたが、天保一三年（一八四二）に庄七は庄太夫の養子となり、九代目として遠山家を継ぐこととなる。

庄七の妻は中里市太夫の長女多き（衛喜）で、二人は弘化三年（一八四六）四月二五日に結婚した。庄七と多きとの間には計六人の子が生まれ、出生順に示すと嘉永三年（一八五〇）二月に長女ひで、嘉永五年一月に長男安次郎、安政二年（一八五五）六月に次女なか、安政五年四月に次男篤矢、文久元年（一八六一）五月に三男駒三郎、元治元年（一八六四）七月に四男岩次郎となる。これら子どもたちのうち、明治二年（一八六九）に長男安次郎が遠山家一〇代目として家督を継ぐこととなり、後に安次郎は景三と改名している。

日記は慶応元年（一八六五）～同三年七月までは庄七が記しているが、同年七月～十一月までの記事は欠損しており、記録が再開した一二月以降は庄七と安次郎が入り混じって日記を書き継いでいる。これは、慶応三年七月から庄七が頭瘡を患ってしまい、その療養をたびたび受けていたためと考えられる。

本書で掲載されている慶応元年～明治四年に至るまでは、幕末維新の動乱の只中であった。そのため、日記にも戊辰戦争に関連する記事や廃藩置県についての記事などが散見され、八戸藩や遠山家が幕末の動乱や明治という新しい時代をどのようにみていたのかを知ることができる。

例えば、本書の解題にも記されている通り、慶応四年（明治元年、改元は九月八日）六月には佐賀藩兵が八戸にやって来たため、八戸藩では城下町の門に藩士を二人ずつ詰めさせて厳重警備の体制を敷き、佐賀藩の者たちを鯨・白銀・湊の三か村に宿泊させた。そのうえで、村に物売りたちを派遣することによって、佐賀藩兵を城下町へは一切近づかせないようにしていたことが記されている（慶応四年六月一八日条）。また同年六月二十九日の記事によれば、藩士の所持高に応じて藩がミニエー銃を備えるよう命じており、八戸藩においてもいよいよ軍備を整える必要性が生じていたことがうかがえる。日記の筆者である安次郎も、こうした状況のなか西洋式兵術への入門と鍛錬をおこなっている様子が日記にはたびたび記されている（慶応四年八月七日条など）。

評者が興味深いと感じたのは、そうした緊張状態のなかにあっても、生活リズムを構築するかのようにな年中行事や農事に関わる記事が毎年みられることであった。例えば、八戸で春の訪れを告げる行事として名高

い「えふり（えんぶり）」は毎年正月にはおこなわれており、三月三日になれば桃の節句の祝いが遠山家では催されていた。しかし、「時節柄」ということもあって、これら行事は簡素化されたりおこなわれなかったりした年もあった。例えば、慶応二年正月一日の「えふり」は、「諸色高直」を理由に不足だったと記されており、明治三年の三月三日は「内裏様計出候」という状態だったという。

また、本書で扱われている期間内では、遠山家に病災や不幸が立て続けに起きている。それに対して庄七や安次郎をはじめとする人びとがどのような行動をとっていたのか記されている点も、評者は大変興味深く感じた。例えば、慶応元年（元治二年四月七日に慶応へ改元）には次男の篤矢から四男岩次郎に至るまでの男子が揃って疱瘡を患ってしまい、これに対して庄七は神酒や供物などを準備のうえ神棚を整え、豆腐・赤飯などを拵えている様子がわかる（慶応元年一〇月晦日条）。また、彼らの見舞いのために多くの者たちが訪れ、見舞い品として「ちん張子（犬の張子人形カ）」「達磨」「からく」「箱入天神」などを持参している（同年一月二日・一七日条など）。これら行為や見舞いの品は、いずれも疱瘡治癒のまじない・祈祷の意味が含まれていたと考えられる。加えてこのような状況のなか、慶応元年には庄七の叔母や実母（七代庄右衛門後妻）が亡くなったことも判明する。特に、実母の看病と死去に際しては、庄七の行った行動が日を追って判明する。慶応元年一二月六日、庄七の母は病に罹り薬三帖が処方された。これ以後、庄七は母に対して懸命に薬を処方したり針医へ治療をおこなわせたりしているが、一向に快復する気配はなく、一二月一三日には「類家地藏」へ祈祷を頼

み、お守り札や護符をもらっている。しかし、母親の病は良くなるどころかますます悪くなっていったようで、一七日には医者たちと相談して薬を処方してもらうほかにも、庄七自身が水薬を購入した。翌一八日には庄七は風邪を理由に欠勤したが、実は母親の看病のために休んだことが日記には記されている。このように、庄七はありとあらゆる手段を講じて母親を看病したが、その甲斐なく、一二月二〇日の五時（午前八時ごろ）に亡くなってしまった。通夜はその日のうちに営まれ、翌二一日に母親は葬送されたが、庄七自身は「野送」、つまり葬送に際しての見送りはしなかったという。

さらに、慶応四年には安次郎の祖母（八代目庄太夫妻、庄七の養母）と庄七の兄直理が相次いで亡くなっている。慶応四年の日記は、庄七が病のため筆者は安次郎になっており、安次郎の祖母は同年三月二五日ごろから病気のため薬の処方を受けるようになっていた。四月一五日になると様子がさらに悪くなり、一七日には父庄七も看病のため暇をもらったが、「夕七ツ」（午後四時ごろ）に祖母は帰らぬ人となった。

さらに五月一〇日には庄七の兄直理も病を患い、それ以後薬を連日服用するようになっていた。同月一七日には祖母の最初の月命日を迎えることになっていたので、安次郎の心中は穏やかではなかったのだろう。安次郎は同日の日記に「うき／＼致」、つまり心が乱れて落ち着かないと記している。直理もまた「いたこ払」（慶応四年五月二七日条）や「類家地蔵」への祈祷（同年六月二九日条）など、治癒のためさまざまな手段が講じられたが、結局快復することなく六月二九日夜に亡くなってしまった。

日記のなかで庄七や安次郎が感情を直接的に表現することはあまりみられないが、親類縁者の看病から死に至るまでのこれら一連の行動をみてみると、実母に対する庄七の思いや安次郎の不安が強く現われているように思える。

二 本書への要望

以上、本書を読んで評者が気になった記事をいくつか列挙してみた。従来、この「遠山家日記」の分析は八戸藩の上級武士の生活や一地方武士による江戸勤番の実態の面から分析を加えられることが多かったように思えるが、切り口や視点によっては、八戸藩政から地域の生活文化、さらには江戸時代に生きる人びとの心性に至るまで、さまざまな分析が可能となる極めて有用且つ貴重な史料であるといえる。

そのうえで、本書の形式的な面でいくつか検討すべき点もみられた。まず、本書の解題は末尾に付されているが、これはできれば最初に持ってきた方がよいのではないだろうか。本書は「刊行のことば」によれば、地域の歴史を広く知ってもらう目的で、市民の方を対象に継続して刊行されている史料集であるとしている。地域の歴史や文化を史料から明らかにしていくことは、可能な限り地域住民と一緒にやっておこなうことが理想的であると考えるが、近世史料は独特な用語・語句が含まれていることもあって、その読解に抵抗を抱く方も少なからずいると思われる。本書は目次・凡例の直後にいきなり日記本文が開始しているため、読者は前提情報が何も得られないまま本文を読むことになる構成となっている。

る。したがって、読者の視点に立てば、なるべく史料に関する知識や掲載されている記事についての前提情報を得たうえで、実際の史料を読む方がわかりやすい構成なのではないかと思われる。

またそれと関連していえば、遠山家歴代系図や八戸藩領地図、用語や登場する人名の索引など、関係する図表や索引などは可能な限り掲載してもらいたいと感じた。日記史料は、基本的に他人にみせることを前提として記されていないため、筆者のみがわかるような書き方をしていることが多い。そのため、家族構成については特に、筆者との関係性が明記されずに記されることがほとんどである。

幸いにも、庄七や安次郎の家族構成については明治四年（一八七一）九月一四日条や同年一月一六日条に記されていたので理解できたが、庄七がいう「母上様」（庄七の実母）と安次郎のいう「御祖母様」（庄七の養母）など、評者ですら登場する人物の関係性の整理に時間がかかったものや、未だ正確に把握できていない人物もいる。併せて、日記に登場する地名も旧字単位で記されているため、これも現在のどこに当たるのか解説や地図を加えた方が良いと感じた。

これらについては、今後精細に整理していくのかもしれないが、市民の方でも理解できる内容を目指していくのであれば、史料を解読するにあたっての系図や索引などの作成・添付は必要であると考ええる。

おわりに

本稿では、『八戸藩遠山家日記』第九巻について、評者が興味・関心を

持った記事や思ったところをいろいろと述べてきた。評者の力量不足により、日記記事を十分に理解できていない箇所や編者の意図を汲み取れていない箇所も多分にあつたように思われる。何卒ご寛恕いただきたい。

繰り返しになるが、本書は幕末維新期における八戸藩の動向から生活文化に至るまで、分析視角が多岐におよぶ一級資料であることは間違いない。これらの解読は地域住民の方々の手によるものと思われるが、地域に残る史料の解読や研究を地元の方々の手でおこなうということは、大変重要な作業であるとともに理想的な姿であると評者は考える。何はともあれ、五〇〇頁にもわたる分量を地道に翻刻した労力は計り知れないものがあり、刊行に携わった方々に敬意を表すべきものがある。本書をもとに歴史研究がさらに進展すること、また地域の歴史に対する理解を深めていく活動が活性化していくことを、評者は祈念してやまない。

なお、「日記」や遠山家そのものについての分析は、既に岩淵令治氏による「八戸藩勤番武士の日常生活と行動」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第一三八集、二〇〇七年）や、三浦忠司氏の『八戸藩「遠山家日記」の時代』（岩田書院、二〇一二年）などがあり、本稿執筆に際しても適宜参照させていただいた。本書の内容をより知っていくうえでも、併せて読まれることをお勧めしたい。

（A5判、五一三頁、八戸市立図書館編、八戸市、令和二年一月三〇日発行、二六二〇円（税込））

（かやば・まさひと 公益財団法人徳川黎明会 徳川林政史研究所研究員）